

## 19 職業適性検査による歯科技工士学科学生の早期弱点抽出の検討

植木一範, 木下美香

明倫短期大学 歯科技工士学科

keywords : 職業適性検査, 基礎学力, 入試選抜, 国家試験, 実習指導

### はじめに

大学全入時代に突入し、近年ますます学生の多様化が進んでいることは本学でも顕著となっている。基礎学力または技術、スピードについてもクラス内で大きな差があるため、落伍者を生じたり、進行の速い手持ち無沙汰な者を生じたりする。本来は高いレベルの教育を行うべきであるが、現状は個別対応をしたり、アクティブラーニングを取り入れたりするなど教育の柔軟性も求められている。

歯科技工士教育では、統一国試に向けた学説の学習も然り、実技についても標準以上の技術力を修得させる必要がある。しかし、教育側の工夫や努力だけでは追いつけない多様化の進行に、入試や入学前から今まで以上に対応を迫られる時代が来ているといえる。

本研究では、職業適性検査を用いて、本学学生の基本的な能力を評価し、弱点抽出の可能性を検討したので報告する。

### 方 法

1. 職業適性検査：厚生労働省編一般職業適性検査GATBの内、紙筆検査のみ11種の下位検査を実施した。下位検査は、①円打点検査、②記号記入検査、③形態照合検査、④名刺比較検査、⑤図柄照合検査、⑥平面図判断検査、⑦計算検査、⑧語意検査、⑨立体図判断検査、⑩文章完成検査、⑪算数応用検査からなる。それぞれの素点から、G：知的能力（説明・教示や諸原理・諸概念を理解したり、推理し判断したりする能力。一般的な学習力）、V：言語能力（言語相互の関係および文章や句の意味を理解し、それを有効に使いこなす能力）、N：数理能力（計算を正確に速く行くとともに、応用問題を解き推論する能力）、Q：書記的知覚（文字や数字を直感的に見分け、違いを見つけ、校正する能力。対象をすばやく知覚する能力）、S：空間判断力（立体形を理解したり、平面図から立体を想像したり、考えたりする能力。物体間の位置関係とその変化を正しく理解する能力）、P：形態知覚（物体あるいは図形を見比べて、その形や陰影、線の太さや長さなど細かい差異を正確に見分ける能力）、K：運動共応（データ入力等、眼で見ながら、手で迅速な運動を正しくコントロールする能力）それぞれの得点で評価した。

2. 対象：歯科技工士学科1年生24名を対象とした。実施時期は、1年前期が終了し、試験や実技の成績が一部明らかになった平成29年10月とした。比較対象は、全国の17-19歳のGATBの平均値とした。

### 結果および考察

GATBの評価項目のうち、歯科技工技術には、S、P、Kが特に関連すると仮定し評価を行った。また、国家試験やその学習においては、GやV、Qも関連すると予想される。図1に示すように本学学生の各項目評価の結果、G、V、Kでは全国平均と差異は小さく、Nでは1段階高い結果となり、Q、S、Pでは全国平均より低い結果となった。特にSの空間判断力では2段階近く低く、ばらつきも大きい結果となった。歯科技工装置を平面的な教科書から完成形を想像する力などが不足しているといえる。CADなどでも同様で2D-3Dの変換が難しい能力の学生も多いのかもしれない。従って、空間判断力のトレーニングを繰り返し、能力を補うなどの工夫も必要であるといえる。

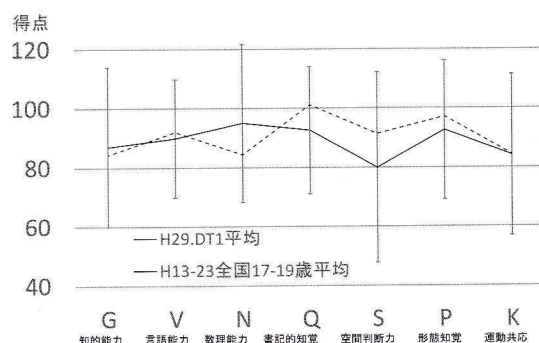


図1 段階別適性能得点の比較